

第6分科会 美術

道高教組 上野 秀実 (釧路江南高校)

美術教育と評価

コロナ禍で中止された昨年度の合研から、今回は ZOOM を使って開催することができた。一方、ZOOM での参加が難しい共同研究、司会者もあり、残念ながら参加者は、司会者兼共同研究者と一般参加者、運営委員の3名止まりでした。

偶然、2本のレポートは「評価」を課題としたものでした。知識の定着を測るペーパーテストのみで評価することのない実技教科である美術は、子どもの取り組みを数値に抽象化することが難しい教科です。日常での気付きや思いを発露とした表現は成果物だけに頼ることなく、その過程をどのように見取めるかが教師にとっての課題と言えるかもしれません。

今回、一般参加の四宮和宏先生(厚岸町立太田小学校)は「図工の評価について」というレポートが提出されました。手塚治虫作品を模した4コマ漫画で語る図工の評価に対する悩みは、教育としての美術に携わる教師にとっては誰しもが痛感するもの。子どもの図工作品を前に教師役のブラックジャックは、ピノコに語ります。

『得手、不得手はあって仕方ないが、どれも思いをもって作ったものに違いは無いんだ』

『なんだか、優劣をつけているようで、モヤモヤしてな』

適正な評価は美術科教師にとって永遠の課題に解決しない難題と言えるでしょう。四宮レポートでは、図工の最大の目標は「図工が好き!」という心を育むことと語られています。現在の学校教育では、子どもの教育活動に対し評価を「A」「B」…と段階で付けています。評価をする上で大切なことは一体何なのかを考えます。子どもに「うまい」という言葉を用いることは、他と比較すること。その子どもの良さが表れる作品に対し、どこにその良さが出ているかを教師は一生懸命探し、褒めてあげることが大切と町研で招いた講師から学んだと言います。このことは図工が各学校に専科がない場合もあり、悩みを持った教師が教研活動により活路を見出す良い例と言えます。レポートでは、ピノコが描かれた4コマ漫画で次のように語ります。

『自分の絵が上手いか下手かなんて、わかっちゃうのよさ。何となく』

『だから「上手いとね!」とか「すごいね!」じゃなくて、『ピノコの絵が好きだなァ』って言ってもらえることがうれしいのよさ』

この一文に私たち美術科教師の光明が見えるようでした。評価を段階として通知表に記載することだけに偏重することなく、作品やその制作過程において、子どもたちの姿に褒めるべき事項を見出すことを教師は大切に、「作品=子ども、その子が作品=自分を好きになれる」ために行うための評価がどれほど教育的な価値があるかを改めて確認した思いです。

高校のレポートでは、デザイン分野の取組みを報告しました。デザインは元より課題解決

の手段の一つです。生徒自身が身近にある課題を発見し、それを題材とし解決のアイデアを構想し、その考えを他に伝達するために造形的な手法で表現するまでを教材としています。ここでの取り組みでの評価を教師単独の視点で行うものとせず、他の生徒による相互評価を取り入れ、多様な見方で評価できるようにしています。教材の間で行うプレゼンテーションでは、発表する生徒の「発見した課題」、「解決のアイデア」そして「表現した図案」、それぞれの項目を視聴した生徒が5段階で評価することにより、作品の完成に向け発表者は何に注力すべきか、自分の探究のどこが優れていたかを具体的に知ることができます。生徒がいつその発展をめざしすることができる取り組みに評価を位置付けたことは、単に評価を成績を付けるための手段に偏重することのない評価のあり方のケース一例として提案しています。

折りしも高校では新学習指導要領の実施を次年度に控え、4観点から3観点へと移行する評価について理解を深めるための教育課程研修会を ZOOM を使って行なったばかりです。今後しばらくは新学習指導要領への対応と観点別評価の移行に教師の労力の何割かは裂かれることになるでしょう。子どもたちの学習到達の段階を表す指標とする評価の一方、美術教育では、子どもたちが自らの感性を高め、表現の喜びを味わい、他者を認める寛容さを身に付けるために行われる評価も同時に大切しなければならないと今回の分科会で感じました。